

## 狭山にゆかりのある文化人紹介 その6

### 陶芸家 植松 隆 氏

【経歴・狭山市とのかかわり】

1948年(昭和23年)生まれ。中学、高校では美術部に所属し油絵を描いていたが、大学時代、気分転換で始めた陶芸の魅力に徐々にはまっていた。27歳で日戸光雄氏に師事し、陶芸の道に進む。生まれ育ちは所沢市だが、父親が北入曾出身という縁から43年前に狭山市に移り住み、1978年「陶房入間野」を開設する。以来、創作活動を続ける傍ら、週の半分は陶芸教室を開き生徒の指導を行っている。また、市内の公民館や福祉施設などで陶芸を教え、市民に陶芸の楽しさを伝えている。以前は銀座や青山で個展をよく開いていたが、近年は市内の画廊で2年に1回のペースで個展を行っている。



【主な業績】

36歳の時、埼玉県展知事賞を受賞し、自分のやってきたことは間違いないという大きな自信になった。その後も日本伝統工芸展、日本陶芸展、益子陶芸展など、全国レベルの展覧会での受賞が続いている。1990年より埼玉県展の審査員も務めている。2000年には、人間国宝を中心に伝統工芸作家・技術者等で組織する団体、公益社団法人日本工芸会の正会員に認定された。西口再開発工事現場から採取した土と信楽の土を混ぜて5000枚のタイルを素焼きし、子ども達を中心に好きな絵柄や手形をつけた後、それらを本焼きして狭山市駅西口市民広場の「思い出タイル」を仕上げた。2010年に完成したこのプロジェクトには3年の歳月を要した。

【陶芸の魅力について】(2018.10.18 陶房でのインタビューより)



納得のいく作品を作るにはどの工程も一つ一つきちんと行うことが大切だが、中でも一番神経を使うのは本焼きである。大窯で18時間かかり、体力も必要な大変な作業である。しかし、自分が思った通りの作品が完成した時の喜びは格別で、好きな事をやる幸せを感じる。陶芸には何の縛りもないと考え、マンネリ化を避けて常に新しいデザイン、技法を生み出そう努めている。学生時代の絵の経験はデザインの現代性に生きていると感じている。

## 今年も日展・創画展入選!

### 日本画家 山崎光雄 氏

1956年狭山市生まれ、広瀬在住。狭山市の中学校美術科の教師として41年勤務。少年時代から絵が大好きで、東京学芸大学中等教員養成課程美術科に入学後、創画会伊藤彬先生に師事し日本画を描き始める。大学卒業後暫く創作活動を休止したが、1997年より本格的な創作活動を開始する。2001年から日本画三大展(日展、院展、創画展)に出品を続け、2004年春の院展で初入選を果たす。この時が生涯最高の喜びだったという。その後も独自の画風が認められ、2005年日展新入選、2009年上野の森美術館大賞展優秀賞、2011年創画展初入選等、今日までに院展3回、日展7回、創画展4回の入選を果たす。今年も春・秋の日展・創画展に入選するなど大活躍で、今年度より創画会会友となる。今後は創画会一本で進んでみようとの闘志を燃やしている。狭山市美術家協会に所属し、狭山市文化団体連合会の理事を務める。芸術祭では作品の出品以外に、チラシ・ポスターの制作に携わるなど、その専門性を活かして活躍している。



遊星 (2019年日展入選作)